

ナスハイワイヤー誘引栽培の 収量および生育特性



写真 ナスハイワイヤー誘引栽培の様子

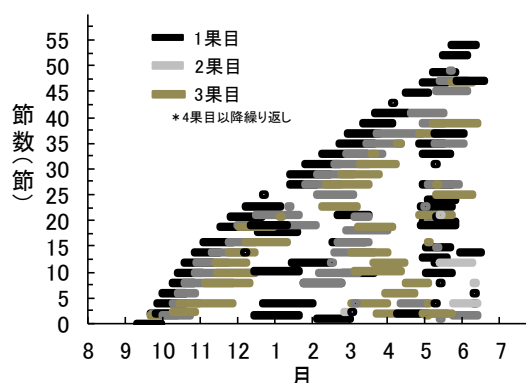


図2 ハイワイヤー誘引栽培におけるナスの開花・落花・収穫の様相（模式図、2019～2020年）²⁾
 定植日：2019年9月11日。
 調査期間は2019年9月11日～2020年6月29日に開花、落花、収穫果実。
 黒は開花日～落花または収穫日の期間を表示（落花は3日後とした）。

当センターでは、養液栽培および環境制御技術によるナス促成栽培の多収生産技術の開発に取り組んでいます。今回は、高軒高ハウスを利用したナスハイワイヤー誘引栽培（以下、ハイワイヤー）について、慣行の摘心栽培との可販果収量および生育特性を比較検討しました。

10a 当たりの可販果収量は、摘心栽培の25.6tと比べて、ハイワイヤーでは33.0tと著しく多収となりました（図1）。ハイワイヤーでは、栽培初期から主枝の伸長に従って各節位の1果～3果目まで安定した着果が見られたことと、栽培後期には下位～上位節位まで連続的な着果が見られたことから、増収へとつながりました（図2）。一方、摘心栽培では、主

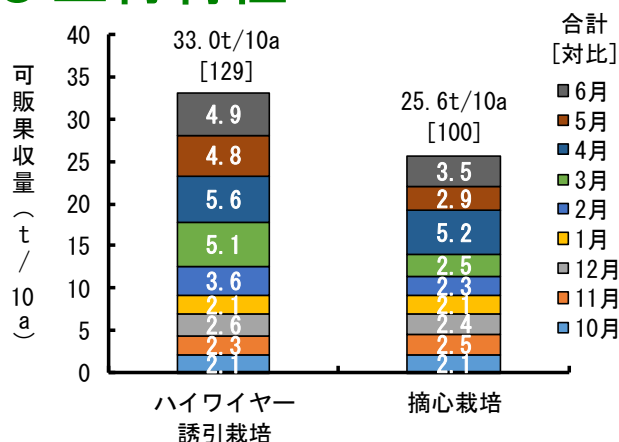


図1 栽培方法の違いがナスの可販果収量に及ぼす影響

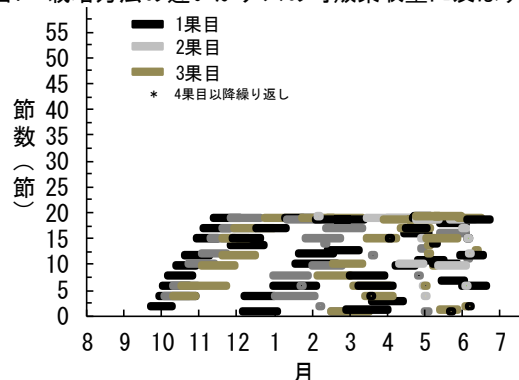


図3 摘心栽培におけるナスの開花・落花・収穫の様相（模式図、2019～2020年）²⁾
 定植日：2019年9月11日。
 調査期間は2019年9月11日～2020年6月29日に開花、落花、収穫果実。
 黒は開花日～落花または収穫日の期間を表示（落花は3日後とした）。

枝摘心までは各節位3果目まで安定した着果が見られましたが、主枝摘心後は、上位節位に多く着果する傾向が見られました（図3）。ただし、ハイワイヤーでは、落花や規格外品も多いこと（データ省略）、下位～上位節位まで着果位置がバラつくために整枝、収穫作業が大きな労力負担となることなど、課題も見られたことから、今後は、ナス多収生産技術と併せて労力削減につながる栽培方法についても検討していく予定です。

本研究は、内閣府地方大学・地域産業創生交付金「I o P (Internet of Plants)」が導く「Next 次世代型施設園芸農業」への進化」の助成を受けたものです。

（先端生産システム第一担当 五藤雄大
088-863-4918）